

「姉ちゃん、こんなところで一人で来るなんて危ないなあ」

周りに迷惑かけない様に人気の無いところで魔法の特訓をしてたユイ。
休憩中に気を抜いていたせいで二人組の山賊に捕らえられてしまう。

「は 離してください……」

「わたし、魔法の練習をしていただけで
お邪魔でしたら別の場所に行きますから……」

「ああ？ まあちよっと煩かったけど
姉ちゃんみたいのなら大歓迎だぜ。へへへ……」

男達はニヤニヤと下品な笑みを浮かべながら
ユイの全身を舐めまわすように視線を這わせる。

「おい！ 聞いてるんだから答えろよ！」

イライラした男は無造作にユイの胸を掴む。

「嫌ああッ……！」

「ちっ うるせえな」

「ちよっと胸触られたぐらいでデカイ声出すなよ」

「やだ……なんで……嫌……いやあ……ッ」

「ツッ!?」

男はズボンをずり下げ勃起したペニスをユイの目の前に晒す。

「いや、揉み心地良過ぎて興奮して
こんなになっちゃったぜ」

「ちよつとこの胸使わせてくれよな?」

「な 何を!?!」

「何っでお前!」

「こんな乳してるクセに今まで誰にも使わせてなかったのかよ？」

「宝の持ち腐れってやつだな」

（やあ…騎士くん…マコトちゃん…助けてえ…）

「あつたかくて柔らかかくて気持ちいいじゃねえか」

「若いから張りが有って最高の乳だな」

男は両方の胸をグリグリとペニスに擦り付けて感触を楽しむ。



「ひあッ!?!」

細身の男は見た目より腕力が有るらしく
軽々とユイを抱え上げる。

「や やだ! 降して!」


「おほ~ 丸見えだねえ~」
「見た目通りの可愛いパンツ穿いてんのな」

「見ないで! やだ…嫌あ!」

「いやいやじっくり見させてもらうぜ…ん?
なんか濡れてねえか?」

ユイの下着の染みに気付いた男がそれを指摘する。

「な…!?! ちが! やだ…なん…で…?」



男はニヤニヤと笑いながら
亀頭を下着越しの性器に押し付ける。

「や やめて！ それは…それだけは…！」

「だから何をだよ？ ん～？」

ぬち…ぬちゅ…

男は下着の湿った部分に亀頭の先端を擦り付け
意地の悪い質問を続ける。

「ひ…んッ…止めで…擦り付けないでえ…！」

「ん～？ なんかエロい声出でねえか？」

「ち 違う！ そんな…んく…んんッ!？」

ずぶ ずぶ ずぬ ずぶ

「ひぎいいッ！ 止めて！ 動かないで…！
本当に痛いの…お願いッ！！」

「なあに そのうち痛みも薄れてくるから
もうちょっと我慢してろや」

ずぶ ずぶ ずぬ ずぬ

「ああ…ッ！ …嫌あ！ …騎士ク…ンッ…たすけ…ッ！」

「キシクン？ 誰だよそれ？ 彼氏か？」

「わりいな 彼氏より先にチンポぶち込んでよ」

「でも、お前みたいな上玉に手を出さなかったヘタレじゃなあ…」

「ッ!?!」

「分かんねえわけねえよな？」
「男が出ずって言えば何のことだか！」

「やだ!! やめてッ! それだけは!!」

「野暮な事言うなよ」

「セックスの締めは中出しだろ？」

「一番奥の子供作る場所に押し付けて全部収まるように
ドピュッと出すのが作法ってもんだろ？」

「嫌あッ!! いやいやッ! やめてえッ!!!」

「ひっひっひ そんな嫌かよ? 種付けがよ？」

「やだあッ! やめて! やめてくださいッ!!!」

「はあ はあ そんな嫌か？」

「お願いします! やめて…ヤメテえッ!!!」

「うう…ッ そうか…嫌か…ぐ…ッ」

細身の男はユイに尻をこちらに向けるように指示する。

(私…また犯されるんだ…)

体力も魔力も残ってないユイには対抗手段がなく
男たちが満足するまで耐えるしかなかった。

男はユイの尻を両手で鷲掴みに固定して、亀頭の先端を秘所に向ける。

にゅぶっ! にゅちゅっ! ぐちゅんっ! ぶちゅんっ!

「ひあッ!? やらっ! あああッ! ああんッ!♥」

無駄だった。

既に膣を2回犯され絶頂し、性の喜びを覚えてしまったユイの体は
快楽を拒絶することが出来ない。

(嫌なのに…嫌なのにいッ!)

男はユイの反応に満足して嬉々として腰を振る。

ユイには見たことないものだった。

大ききの異なる玉が数珠つなぎで連なっているソレはユイにも直感的に嫌なモノに違いないとわかる。

(何…コレ…?)

俗に言うアナルビーズだ。

男はニタニタと笑いながら、引き摺るユイにソレを見せつける。

「や やめて…やめてください…」

男は期待通りのユイの反応に満足すると、ソレをユイのアナルに押し付けた。

男の息が荒くなり、ユイにも男の絶頂に近いことがわかる。

(また…膣内に出されちゃうの…?)

(本当に…赤ちゃん…出来ちゃうっ…嫌…嫌あ…ッ!)

ユイは最後の力を振り絞り抵抗しようとするが
2度の絶頂でかなりの体力を消耗しているせいで思うように体が動かない。

このままではまた膣内射精される。
更に妊娠する確率が高まってしまう。
一番恐れている最悪の事態になる。

しかし、分かっているが無理だった。

「あ……うっ……」

ユイが初めて見た勃起した男性器。

ユイの処女を奪い今まで何度も獣の様な交尾して種付けされた陰茎。

ユイが何度も絶頂させられ、それを拒むことのできなかつたペニス。

最大時まで膨らんだソレを見て、ユイはトラウマがよみがえる。

「私……これに犯されたんだ……」

「こんなに大きいモノが私の体を貫いて……」

「何度も何度も……嫌なのに……中に出されて……」

ずりゆ ずりゆ ずりゆ ずりゆ
れるる ぺろ ぴちや れるる ぴちや

胸を上下に動かして竿を抜きながら亀頭を舐めまわす。

男はこの責め方でいき易いことをユイは覚えている。

「おっ…おっ… おうふッー」

（早く…早く射精して…ッ）

射精するまで開放してもらえない。

射精させれば犯されずに済む。

だからユイは手を抜かず念入りに手厚い奉仕をする。

びゅ……びゅる…

「ちゅるるる…くちゅるるるるるる」
「くぐぐ…ちゅすすすするるー」

射精が落ち着いた後も、念入りに亀頭の先端に吸い付いて尿道の奥に残ってる精液も全て吸い出して飲み干していく。

「…ちゅるるるるるるるるるる」

「も もう出ねえよッー 回を離せてー…」

「ま まだ…残ってるから…」

れる…ぴちゃ…れるお…

「はあ はあ まだ…出ますよね…?」

「……」

男は十回程射精した後、気を失っていた。

それでもユイはずっと回淫を続けてペニスから
精液を吸い出している。







@ichio_x



@ichio_x



@ichio_x

@ichio_x









@ichio_x